

雑 録

田丸節郎博士の本誌に對する批評

[物理化学の進歩]は非常に面白く拜見致し候が御骨折の程は拜察して御勇氣に敬服し居る次第に候。唯今の處物理化学最近の進歩の解説と云ふ様に見候がかやうのものが普通の物理化学論文集よりも實際的にして且つ緊要なる事申す迄もなく御着眼に感服し居る次第に御座候。箇々の狭い偏りたる新測定乃至實驗的新事實の記載は物理化学者の多き國には最重要なるものと存じ候へ共日本の如く物理化学者の少き國殊に一般には物理化学の重要なる諸大問題に就てさへ多く無關心無知識なる國に於ては寧ろ此等の重要なる物理化学の諸大問題を解説批評して一般化学者を教育する事の方が最重要なる事柄にはあらざるか従つて日本には *Zeit. f. physik. Chem.* よりも寧ろ motto 丁寧に解説を付し物理化学界の趨勢現狀を説く[物理化学]の進歩の方が遙に有意義と存じ候小生は此の方面に將來も御盡力下さる様御願ひ致し度く農科・工科・醫科・其の他の出身化学者全部を購讀者の對象として此等の人々に興味あり理解し易き形にて物理化学並に其の進歩の狀態を傳へ度と存候(中略) 將來は *Zeit. f. physik. Chem.* と *Zeit. f. Elektrochem.* とに相當する材料を段々に附加し行き立派なるものに仕立て度と存じ候が一つ小生に理解し兼ねたるはフルマートを何故に標準型にせられざりしか。色々の御都合も有之べく候へ共識者の指導によりて我國歐文雑誌は學術研究會議の各科の雑誌も各大學の紀要論文集も同一型に一定されたる今日日本文のものも一つの標準型

をきめ(出来れば歐文のものと同一型)度く然すれば各著者は別刷を取れば此の別刷は何雑誌のものも皆同一型なる爲め之を集めて直に製本出来るのみならず各雑誌中自己の興味ある部分を勝手に抜き取り之を製本して閱覽に便せしむる事も出来るやう相成可申と存じ候。

例へば生物化学に興味ある人は、薬学雑誌、生物学雑誌、日本化学會誌、大學紀要等に表はれたる生物化学關係の興味ある報文記事丈を抜き取り且つ分類して之を製本すれば甚だ便利にて Photochem. Photoclec. に興味ある人は物理化学の進歩、化学會誌、數物雑誌等に現はれたる當該問題關係のものを引抜き製本すれば便利なるの類に御座候。是は別に斬新なる思付きといふ譯では無之既に Kaiser Wilhelm Institut 設立の初めに當つて新に獨立の論文雑誌を發行せんとした際にエミール、フイツシャー博士が極力反對し雑誌の種類に徒らに多くなり文献の散漫になるを防ぎ尙且つ Kaiser Wilhelm Institut 獨自の論文集を作り得る方法として標準雑誌に發表したる別摺りを數百乃至數千取寄せ標準フルマートにあらざるものは縁の廣さを加減して無理にも同一フルマートに收め之を集め製本して Kaiser Wilhelm Institut 紀要として出すことに定まり候次第に有之候、而もその際フルマートの一定せざる物のありし爲に無益の出費と不便とを要したる經驗に鑑み出来る丈フルマートを一定し度と考へ居る次第に御座候。妄評多罪。

田丸博士の御批評を厚く編者等は感謝致します。特にフルマートに關しては編者等の不注意でありました。將來ある適當の時期即ち第一卷を完成した時書肆と交渉の上に改正したいと存じます。御厚志を有り難く御禮申し上げます。(編輯者)

一般投稿に就て

現在の處本誌は年三回の出版(三月,七月,十一月)の豫定であり只今編者の手許に集る原稿で充分でありますが將來本誌出版の財政的の基礎が確立した暁には發刊の回數を増加して廣く一般の投稿を御願ひ致し度と存じます。

京都帝國大學物理化學研究室大正十五年度研究成績發表討議會

昭和二年二月二十六日に京都大學樂友會館で研究成績發表會を開きました。其の演題内容の大略は次の様であります。

1. ハロゲン化鉛の結晶生成に對する[ウエーマルン]法則の適用

安田 欣治 木田 祐次 陳 之 霖

ハロゲン化カルシウム水溶液と硝酸鉛水溶液とを混じて生ずるハロゲン化鉛の結晶の大きさは[ウエーマルン]法則に従ひ兩水溶液の濃度溶解度時間溫度の函數なることを證せんとす。

2. 鹽化ナトリウムの蒸氣壓測定

馬 場 日 出 男

鹽化ナトリウムの蒸氣壓を攝氏一二五〇度迄直接測定を行ひ、その蒸發熱解離熱等を計算せり。

3. ドンナン氏隔膜平衡に立つ内科學的物理化學的研究

椎 木 潔 司

1. 隔膜平衡と人體液との關係

2. 分離蛋白質の隔膜平衡成立の有無

3. 結論

4. [ワイゲルト]效果の擴張

今 堂 健 雄

[ワイゲルト効果]或種の物質に對する直線偏光の特殊効果は特種の膠質系のもつ特性にはあらざるかとの豫想の下に種々の膠質系につきて研究し、今日の所銀—ゼラチン及び水銀—ゼラチン系に是を見出し得たり。銀—ゼラチン系に付き今日まで研究せる結果の主要を述べんとす。

5. 化學的原因によるダルトン定律への違背に就て

四手井次 太郎

二成分より成る混合氣體に就てのダルトン定律への違背は從來多くは二種分子間に働く凝集力によりて説明せられたりと雖も、此の違背は化學的原因に基く場合なしとせず。水蒸氣—氣體鹽化水素系に就て得たる結果を述べんとす。

6. 樟腦の蒸氣壓測定

吉 本 晴 一

樟腦の精密なる蒸氣壓を測定し、その蒸發熱を計算せり。

7. [アトムストラーレン]に就て

城 野 和 三 郎

[アトムストラーレン]により氣體化學反應の機作を研究せんとし、先づ銀、ナトリウム及び沃素の[アトムストラーレン]に就て述べんとす。

8. 濃厚水溶液の蒸氣壓測定

古 谷 登

濃厚水溶液特にこれが高溫度に於ける蒸氣壓を測定し、蒸發熱、溶解度及び活性度を計算せり。

9. 鹽素及び水素の光化學的結合に就て

市 川 禎 治

鹽素及び水素の光化學結合の初期反應研究の一新法を提出し、研究結果の二三に就て述べんとす。

10. 強電解質溶解度の理論

堀 場 信 吉

講演者が數年前に與へたる分子容と溶解度との關係は、これを直ち

(124)

雑

録

に強電解質の場合に應用することを得ず。依て強電解質の溶解度とその「イオン」容積との關係は如何なる理論により考察すべきものなるかを論ぜんとす。